

# 英文の読み方を考えるⅩ

## —要素の移動と談話②—

平井 正朗

(本編は、No. 80 に掲載された「英文の読み方を考えるⅩ—要素の移動と談話①—」の続編である。)

S+be 動詞+形容詞+to+他動詞、もしくは自動詞+前置詞の形態であり、to 不定詞の他動詞、もしくは前置詞の目的語となる要素が主語の位置にある左方移動の事例を検討する。

文型は SVC(M)、to 不定詞は副詞的用法と判別されるが、この場合、補語になる形容詞が「難易」(easy, difficult など)、「可能性」(possible, impossible など)、「感情」(amusing, delightful, pleasant など)、「価値判断」(important, stupid, appropriate など)を表すものが多い。too ~ to ... 構文や enough ~ to ... 構文などに見られる目的語が欠落した現象を統一的に説明できるという利点がある。

(01) As the “no”s mount up, positive feelings can decline, making it harder and harder to pick up the phone to make the next call. **Such rejection is especially hard to take for a pessimist**, who will interpret it as meaning, “I’m a failure at this; I’ll never make a sale”—an interpretation that is sure to lead to apathy and defeatism, and even depression. (関西大)  
(「ノー」と言われることが増えると、積極的に取り組むという感情が減退し、次の電話をかけるために受話器を取り上げるのがますますつらくなる。そのような拒絶は、悲観主義者にとっては特に受け入れがたく、「私はこれでダメなのだ。絶対に売ることはできないだろう」という意味に解釈する—確実に無気力と敗北主義、そしてうつ病にさえなりうる解釈となる。)

(01)は他動詞 take の後に前置詞句 for a pessimist があるため、見落としやすいが目的語である Such rejection が主語の位置に左方移動したのものになっ

ている。

(02) The homogeneity issue is all important, but **it is not easy to deal with**. (東京大)  
(同質性の問題は、とても重要なものだが、それに対応するのは容易ではない。)

(02)の場合、it は形式主語ではなく、The homogeneity issue を指示する前方照応語句であり、deal with の意味上の目的語になっている。読解では「it ~ to ... があれば it は形式主語(目的語)であり、it は訳さない」という安易な立場は廃し、deal with の後に前置詞の目的語が欠けた「不完全な文」になっていることから目的語が it の位置に移動したものと解する。

(03) On the other hand, people with disabilities also face **invisible or symbolic barriers which are probably more difficult to overcome** because they are often not recognised by even the most sensitive of able-bodied citizens. (早稲田大)

(他方、障害のある人たちは、さらに最も感受性の高い健常な市民でさえしばしば気づかないために、克服するのはおそらくもっと難しい目に見えない、象徴的な障害物にも直面している。)

(03)は関係代名詞 which 節の overcome の意味上の目的語は先行詞 invisible or symbolic barriers である。

(04) Today, 67 cities in the world have some kind of subway system. And new ones are being built all the time. **Some of the more recent subway lines are not only fun to ride, but are a pleasure to look at**. (立命館大)

(今日、世界の67都市には何らかの種類の地下鉄がある。そして新しいものもずっと建てられつつある。より最近の地下鉄には単に乗って楽しいだけでなく、見る喜びがあるものもある。)

(04)は ride と look at の意味上の共通の目的語が Some of the more recent subway lines となっている。ここでは fun と to ride, a pleasure と to look at が同格関係と捉えるとわかりやすい。

(05) *It is* perhaps because our lives are so enriched by technology *that* we worry about becoming dependent upon it, doubt its promises and fear the future it might create for us.

(名古屋大)

(我々が科学技術に依存してしまうことを心配するのは、その展望を疑い、それが我々にもたらさであろう未来を恐れるのは、おそらく科学技術によって我々の生活があまりにも豊かになっているからである。)

(05)は副詞節 perhaps because our lives are so enriched by technology を焦点化した強調構文である。副詞(相当語句)に焦点が当てられる場合、that 節には「完全な文」が後続する。通例、It is X that Y という強調構文では、「Y は X だ」と「返り読み」が主流になっているが、「X なのは Y だからだ」のように X に焦点を当てた訳出でもよい。読解では、It is と that(who, which, when など)を消去して「完全な文」になれば強調構文を疑い、強調すべき名詞、もしくは副詞(相当語句)に焦点を当てた和訳をおこなう。

(06) What may be more important, *it was* to a large extent the business of printing, advertising, and distributing British books *that* brought native publishing from infancy to the beginnings of maturity, and there had to be a mature and relatively stable publishing industry before a true "American literature" could come into existence.

(東京学芸大)

(さらに重要なことに、アメリカの出版業を幼稚なものから成熟初期まで成長させたのが、大部分、イ

ギリスの書物を印刷、広告、流通する仕事であったということ、そして本物の「アメリカ文学」が誕生する前には成熟し、比較的安定した出版業界が存在しなければならなかったということである。)

(06)では副詞句 to a large extent に後続する名詞句 the business of printing, advertising, and distributing British books が焦点化された強調構文になっている。この名詞句は that 節の brought の意味上の主語である。強調構文において名詞(相当語句)が焦点化される場合、前提節となる that 節は名詞が欠落した「不完全な文」になる。It is X that Y の X が名詞(相当語句)の場合、次のような可能性もあるので注意を要する。

(07) For some time I have had a person provide me with a rose boutonniere to pin on the lapel of my suit every Sunday. Because I always got a flower on Sunday morning, I really did not think much of it. *It was* a nice gesture *that* I appreciated, but it became routine.

(慶応大)

(しばらくの間、私は日曜日ごとにスーツの襟につけるバラの花を準備してもらっている。日曜日の朝にはいつも花をもらっていたので、私はそれがたいしたこととは思っていなかった。それはありがたいすてきな行為であったが、ごく日常なことになってしまった。)

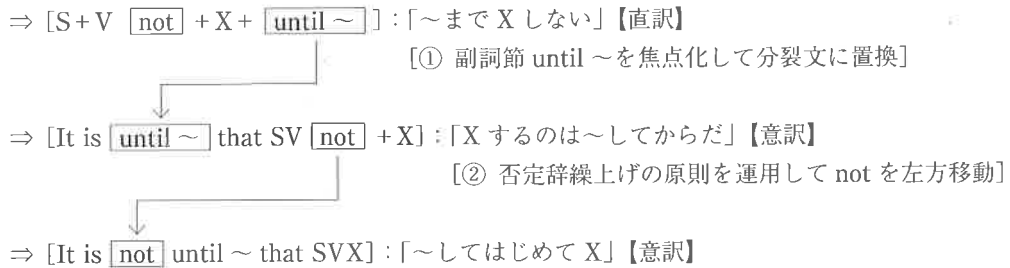
(07)は It が前方照応語句として機能し、「日曜日の朝に花をもらうこと」を指示し、that は a nice gesture を先行詞とする関係代名詞である。

(08) Beans were later fermented to make a wine, but *it wasn't* until about 1000 A.D. *that* Arabian people began to boil coffee beans to produce a drink similar to what we know today.

(関西学院大)

(コーヒー豆は、後になってワインを作るために醗酵させられた。西暦1000年頃になって初めて、アラブの人々は、今日、我々が知っているものに似た飲み物を作るためにコーヒー豆をゆで始めた。)

It is not until A that B が派生するプロセスを次のように考えるとわかりやすい。



(09) Even after children come to be able to reason independently, instruction must continue with a concern for their moral development and society's well-being. **It is not that** total cooperation to authority in all contexts is desirable; **it is that** in certain situations where the good of the community is at stake, the complete acceptance of authority is more than helpful.

(京大)

(子供たちが自律して道理をわきまえることができるようになったあとでさえ、彼らの道徳的発達と社会の幸福に配慮しつつ、教育は継続していかなければならない。とって、どんな状況にあっても全面的に権威を強調することが望ましいというわけではない。社会の幸福が危機に瀕しているような特定の状況下では権威を完全に受け入れることは十二分に役に立つということなのだ。)

(09) のような場合、It is not that ... : it is that ... で関連することが多いが、not A; B(not A but B) に近く、「～というわけではないが、…」と訳出するとよい。

(10) **Hopes** were expressed **that the understanding and control of nature would improve techniques in industry and agriculture.**

(東京大)

(自然を理解し、制御することができれば、工業や農業の技術を向上させることができるであろうという希望が表明された。)

本来、名詞に後置され、名詞を修飾する that 節、関係詞節、前置詞句などが右方移動し、主文から外

置されることがある。情報構造的から言えば、文の要素が通常の SVX で現れる位置よりも文末(方向)にある場合、それが新情報としての機能を明示することにある。換言すれば、情報価値が高い要素を右方移動することができるということである。(10) は that 節が文の主語である Hopes と同義関係になっていることから that が同格の名詞節を導く従位接続詞であるが、that 節の主語である the understanding and control of nature に条件節が潜在していることなどにも注意して解釈する必要がある。

(11) But in 1925, Tennessee Christians had gotten **a law passed that said it was unlawful for any teacher to teach any theory that denied the story of the God's creation of man as taught in the Bible.**

(東北大)

(しかし、1925年、テネシー州のキリスト教徒たちは、教師が聖書の中で教えられているように神の人間創造の物語を否定する理論を教えることは、違法だとする法律を可決させていた。)

(11) は Tennessee Christians(S) had gotten(V) a law(O) passed(C) の第 5 文型である。語法上 get+O+p.p. ~ になっているが、ここでは that に said(V) が後続し、S' が欠落した「不完全な文」になっていることから that が関係代名詞であることが識別できる。読解では関係代名詞 that 以下の sense group が形容詞節として機能し、先行詞 a law を修飾していることを読み落とさないようにしたい。

(12) When we began arithmetic, we worked with little wooden sticks; if you had to take

three from ten, you arranged ten sticks, counted out three, and then added up what you had left. But the more clever pupils soon began to give up using them, and *the day came when to need to use the sticks would be to admit that you were falling behind.* (滋賀県立大)  
 (私たちが算数を始めたとき、小さな木の棒を使って勉強した。例えば、もし10から3を引かなければならないなら、10本の棒を並べ、3本を数えて外に出し、それから残ったものを合計するといった具合であった。しかし、児童たちが利口になり始め、それらを使うのをやめ、その棒を使う必要があるということは、ついていけないということを認めることになる日がやって来た。)

(12)は通例、*the day when ... came* の文の主語が“heavy”であるため関係副詞節を外置すると指導するケースが多いが、実際の英作文となるとなかなか書けないものである。

(13) *A case could be made* ① *that I became the thinker, the dreamer* ② *that I am while stocking the many cans and bags and food items for the people of this town.* (静岡大)  
 (私がこの町の人々のために、多くのカン、袋、そして食料品を棚にしまっている一方で、現在のような思想家、無思想家になりうる場合もありうる。)

① *that* は関係副詞であり、*a case that [where] ...* の外置構文である。②の *that* は関係代名詞であり、主格補語の *the thinker, the dreamer* が先行詞となっている。ここでは①の *that* が *A case* と不連続名詞句になっていることへの見落としや先行詞である *the thinker, the dreamer* が等位構文であることを読み取りたい。

(14) *In America Boas and his students encountered languages and cultures which differed enormously from those of Europe. So great were differences in the area of vocabulary alone that, as Edward Sapir observed: “Distinctions which seem inevitable to us may be utterly ignored in languages which reflect an entire-*

*ly different type of culture, while these in turn insist on distinctions which are all but unintelligible to us.”* (信州大)

(アメリカで、ボアスと彼の学生たちはヨーロッパのものとは大きく異なる言語と文化に直面した。語彙分野だけでもその差異はたいへん大きいものであったので、エドワード・サピアは、「我々にとって避けられないように見える差異は、全く異なる形式の文化を反映する言語において完全に無視されているかもしれない。一方で、これらの言語が、今度は我々にとってほとんど理解できないような差異を強く主張しているのである」と観察した。)

(14)は *So great(C) were(V) differences ~ (S)* の構造であり、〈因果関係〉を表す *so ~ that ...* 構文の倒置になっている。第一文で「アメリカの言語文化に対する差異」について述べ、さらに旧情報から新情報への談話の流れの中で「文化間差異」に対してエドワード・サピアがその原因を観察し、結果的に「他者理解が困難になる可能性がある」という文脈を明示している。

(15) *Having grown up as readers of the printed word (and possibly even scribblers in margins), we may take for granted the processes involved in the traditional activity of reading — so let us remind ourselves. The printed word is presented to us in a linear way, with syntax supreme in conveying the sense of the words in their order.* (上智大)  
 (印刷された文章の読み手(そしておそらく余白になぐり書きする人間でさえある)として成長したので、我々は伝統的な読むという行為に含まれる過程を当然のことと思っているかもしれない。—だから思いおこそうではないか。印刷された言葉は、その言葉の意味を順序通りに伝えることを最重要とする統語法によって、我々に直線的な方法で提示されるということ。)

(15)は *take+O+for granted* の *O* に相当する名詞句 *the processes ~* が重名詞句転移されたものになっている。本来の語順では動詞と前置詞句が離れすぎて修飾関係が曖昧になるというアプローチもあ

るが、長く複雑な構造をもつ要素は情報価値が高く、焦点となりうるために文末重点(end weight)の法則に適合し、さらに新情報は文末に近いところに置くという文末焦点(end focus)にも関係するという点をおさえたい。読解スキルとして、前置詞+名詞は( )でくくり、Vの語法に注意しながらその前後をつなぎながら文型を考えるのが基本である。

(16) Finally, in 1880, Parliament passed the Definition of Time Act, which introduced a universal time, this being defined by the time on the Observatory clock at Greenwich. This, as we might imagine, could well have induced in some quarters *the same resentment as the idea of a single European currency does in others today*, though whether feeling ran sufficiently high as to motivate the blowing up of the Observatory is a matter for debate. (大阪大)  
(ついに、1880年、議会は統一時間を導入する時刻定義法を通過させたが、これはグリニッジの天文台時計の時間によって規定されたものである。想像できるように、天文台を爆破する動機となるほど、憤慨したかどうかは疑問の余地があるが、これは今日、単一欧州通貨案が引き起こしているのと同じ憤りを、ある種の人々の中にも引き起こす可能性は十分あっただろう。)

(16)は could well have induced の目的語となる the same resentment ~が重名詞句転移したものになっている。他動詞や前置詞の後に本来後続すべき目的語がなく、前置詞句があれば( )でくくると文構造が見極めやすい。

(17) John Law was born in Edinburgh in 1671, ① *the son of a wealthy goldsmith*, ② a profession which then included the roles of banker and money-lender, since precious metals were the only currency. (早稲田大)  
(ジョン・ローは1671年にエジンバラで裕福な金細工師の息子として生まれた。当時、貴金属が唯一の通貨であったので、金細工師は銀行家と金貸しの役割も兼任する職業であった。)

(17)の①は文のSである John Law と同格関係にあった重名詞句が右方転移(right dislocation)したものである。学校文法に従って文の主語と同格関係にある“heavy”な語句の移動、もしくは being 任意削除の分詞構文と説明すれば対応可能である。②も直前の a wealthy goldsmith と同格関係、もしくは分詞構文 being の任意削除と解することができる。

(18) *Far away from the beautiful lawns of New Delhi lies West Delhi's Swaran Park Industrial Area.* (東京大)

(ニューデリーの美しい芝生からはるか遠くに、ウエストデリーのスワラン・パーク工業地区がある。)

場所や方向を表す修飾語句が文頭に位置し、V+Sが後置される構造を場所句倒置と言う。

以下のような現象が想定されるが、文頭に場所や方向を示す副詞(句)があれば、文の主語となる名詞が現れることを期待して読む。

(1)  $M + [\phi + V + \phi] + S$

(2)  $M + V + [S + \phi + \phi]$

(3)  $M + [V + S + \phi]$

(18) は場所を表す副詞句 Far away from the beautiful lawns of New Delhi が文頭に位置し、VSと後続している。トピックの「舞台」設定として「ニューデリーの美しい芝生からはるか遠く」という「漠然」とした空間を提示し、新情報となる「ウエストデリーのスワラン・パーク工業地区」に視点を移動させている。読解過程では、キーワードになる「スワラン・パーク工業地区」をインプットして次にその具体説明を期待しながら読み進めたい。

(19) ① Newton arranged his sparse, dark room with a table in the middle. ② On the table he aligned, from right to left, a magnifying glass (a lens) and a prism. ③ To the left of the table a

white board was set up, reaching almost to the ceiling, with a series of small holes lining up vertically. ④ *To the left of this lay the second prism, mounted directly behind the lowest hole in the board.* (京都大)

(ニュートンは、家具のほとんどない、暗い部屋を整え、テーブルを真ん中に置いた。テーブルの上に、彼は右から左へ拡大鏡、そしてプリズムを置いた。テーブルの左側には、ほとんど天井まで届く白い板が据え付けられ、板にはいくつもの小さな穴が垂直に一列に空けられていた。この左側に、第二のプリズムがあり、板に開けられていた穴のうち一番下の穴のすぐ裏側に据え付けられた。)

(19)は④が場所句倒置である。①では新情報として a table を置くという漠然とした空間設定、②では旧情報となる the table の「上」に新情報となる a magnifying glass(a lens) and a prism を追加し、具体説明している。③では the table の「左側」の a white board に視点を移させ、分詞構文の付帯状況を用いてその詳細として a series of small holes に言及している。④ではさらに a second prism という情報を追加し、その具体説明を mounted 以下で描写している。

#### ■評価のガイドライン

- (1) O+S+V の倒置を識別することができる。
- (2) 否定を表す副詞(句、節)が文頭に位置する倒置を識別することができる。
- (3) to 不定詞の他動詞、もしくは前置詞の目的語となる要素が主語の位置にある左方移動を識別することができる。
- (4) 強調構文を識別することができる。
- (5) 名詞を修飾する that 節、関係詞節、前置詞句などの外置構文を識別することができる。
- (6) 左方に位置すべき語句が右方にシフトした構文を識別することができる。
- (7) 場所や方向を表す M が文頭に位置する場所句倒置を識別することができる。

(龍谷大学附属平安中学校・高等学校 校長補佐)